

interview 平井元喜 被災地を想う演奏活動

文◎編集部 坂井孝著



コンサートヘボウ（アムステルダム）でアンコールに応える平井さん



東日本大震災で奇跡的に残ったコンサートホールでのチャリティーコンサート

『平井元喜 ピアノリサイタル』

7月1日（金）19:00 銀座王子ホール

【曲目】ベートーヴェン：ソナタ第27番／シューベルト：ソナタ第21番／平井元喜：小倉百人一首による《音詩》（選：冷泉貴実子／2016年委嘱新作、日本初演）、Grace & Hope～祈り、そして希望／ショパン：マズルカ第41番、ノクターン第4番、スケルツォ第2番 [ゲスト] 冷泉貴実子（お話）

團ミリオンコンサート協会 03-3501-5638

HIRAI Motoki

ピアニスト、作曲家。73年東京生まれ。桐朋高校、慶応義塾大学、英王立音楽院大学院卒。ロンドンを拠点に世界各地を演奏旅行。米カーネギーホール、團コンサートヘボウ、英ウィグモアホール等でしばしばリサイタル。BBC、NHK等テレビ・ラジオへ多数出演。音楽を通じて平和・環境・医療・教育問題にも取り組み、'3.11.以降は内外各地で復興支援コンサートを30回以上続けている。



平井さんが参加した熊本のお祭り盆踊り

平井元喜さんはチャリティー・コンサートを積極的に行なっているピアニストの一人。熊本地震は、ワールドツアーの中で東日本大震災5周年の時期に行った一連のチャリティー・コンサートの最中に発生していた。

「アムステルダムでの公演を終えて間もない頃でした。4月28日のウィーン公演（コンツェルトハウス）までの5公演の収益を震災孤児・遺児のための『東日本大震災ふくしまこども寄付金』（福島県庁）に寄付すると公にしていたものですが、後から別のチャリティー先を加えるのはいかがかと一瞬迷いましたが、そんなことよりもまず行動せねばと思い、急遽会場に募金箱を置き、プログラムとCDの売上を熊本に寄付することにしました」

熊本は、平井さんにとっては思い入れのある場所である。

「親戚や友人がいるのと、熊本市現代美術館で演奏したこともありです。コンサート前夜、夏の暑い盛りで甚平を着て独り散歩に出たんです。熊本城を見た帰り、小泉八雲旧邸の隣の小さな公園で盆踊りをやっていました。よそ者という目で見られるかなと思ったり、熊本弁で『おいで、おいで！一緒に踊ろうー』って、皆気さくに誘ってください、すぐに溶け込めて、熊本の人の温かさを感じました。最後のくじ引きでは2等賞が当たり、そしたら皆が自分のことのように喜んでくれて、本当に楽しい思い出です。だからこそ身近に感じますし、とても心配です」

ワールドツアーの東京公演が、7月1日（金）に銀座・王子ホールで開催される。ベートーヴェンのソナタ第27番、シューベルト最後

のソナタ、ショパンの作品群、そして自作の《Grace & Hope》（祈り、そして希望）（2011）、日本初演となる委嘱新作《小倉百人一首による〈音詩〉》（2016）を弾く。

「自作以外のところは、ウィーンに合わせたプログラムリングです。シューベルトの大作や、彼のホ短調ソナタに影響を与えたベートーヴェンの同調のソナタ、またウィーンで若い時にデビューしたショパンの作品です。

《Grace & Hope》は震災から半年経て作曲したので、過去への祈りだけでなく、未来への希望を込めています。近年ではより普遍的な世界の平和と皆に幸せになって欲しいと願って、被災地での演奏会やチャリティー・コンサートなどで弾いています。《音詩》は、今回のツアーのために藤原定家の直系・冷泉貴実子さんに百人一首から十首を選んでいただき、それらをイメージして作曲した幻想的で自由な作品です。最初のロンドン公演の時は6割が即興だったのですが、回を重ねるごとにだんだんとひとつの形に落ち着いてきました。もちろんどのバージョンを良いと思うかは人それぞれですが、この東京公演でとりあえず完成したらいいですね」

最後に、演奏会へ向けての思いをうかがった。

「私も一回一回フレッシュな気持ちで演奏しますので、先入観を持たずにご自身の感性で、正直に受け取っていただけたらと思います。私がプログラムにこう書いたからとか、誰かがこう言っているから、ではなく、小説を読む時、その人なりに登場人物の顔を思い浮かべ声が聴こえますよね。それと同じことです」